

序

高橋慎一郎

年間二千万人の観光客が訪れるという、鎌倉。その魅力は、幕府が置かれたころの都市の雰囲気を残す寺社や遺跡と、陽光を受けてきらめく海や緑に包まれた谷の静寂などの自然との調和によるところが大きい。

鎌倉時代以来の都市鎌倉の構造は、中学・高校の教科書でもしばしば書かれているように、「北・東・西の三方を山に囲まれ、南に海が開けている」という地形を、巧みに利用したものである。古代・中世の人々にとつての鎌倉は、「山」の印象が強かったようである。奈良時代の『万葉集』には、「薪樵る 鎌倉山の 木垂る木を まつと汝がいはず 恋ひつつやあらむ」

という歌が収められている。また、院政期の『永久四年百首』（一一一六年成立）にも、

「われひとり 鎌倉山を 越えゆけば 星月夜こそ
うれしかりけれ」（肥後）

という歌がある。いずれも、鎌倉全体を「鎌倉山」と称しているのである。この二首に限らず、古代・中世の文芸作品では、鎌倉全体を「鎌倉山」と記す例が多く見られ、山々に囲まれた鎌倉というイメージが広くゆきわたっていたことがわかる。

いっぽうで、鎌倉時代後期の『徒然草』において、鎌倉で鱈をもてはやすことを嘆くエピソードが見られるように、中世後期のころから江戸時代・明治時代へかけて、鎌倉には次第に「海」のイメージが強まっていく。おそらくは、水上交通の発達に伴う交易の隆盛、「唐物」と呼ばれる中国からの貿易品の流入、さらには、江の島とセツトになった鎌倉観光の定着などがその背景にあるのであろう。

ただし、中世以来、実際に都市鎌倉に暮らす人々にとつては、「山」や「海」そのものよりも、その両者に挟まれた、ごく限られた低地部分こそが、生活の舞台として身近

なものであった。具体的には、海岸から一步内側に広がる「浜」や、山に囲まれて入り組んだ傾斜地を形成する「谷」がそれにあたり、とりわけ「谷」は、鎌倉における一種の地域単位として重要な意味を持ったのである。鎌倉時代成立の『とはずがたり』に見える、「階ざはしなどのやうに重々に、袋の中に物を入れたるやうに住まひたる」という著名な叙述は、谷に密集して暮らす鎌倉びとのイメージを良く表現している。

鎌倉では、谷を「ヤツ」もしくは「ヤト」と呼び、「谷戸」とも表記している。この読みは中世以来のものであり、鎌倉時代の辞書『名語記めいごき』に、「鎌倉に、いりいりをやつとなづく。さて、谷の字をやつとよめる心。如何」と見えている。ちなみに、「いり」とは、奥に引つ込んだところをいう。

また、同じ鎌倉時代の阿仏尼あぶつにの手になる紀行文『十六夜日記じゅうろくやにっぴ』にも、「郭公くわくこう（ほととぎす）のはつね（初音）ほのかにもおもひ絶えたり。人づてにきけば、『ひきのやつ（比企の谷）』といふ所に、あまたこえ聲鳴きけるを、人聞きたり』などいふをきつて、『しのびねは ひきのやつなる ほととぎす 雲るに高く いつかなのらむ』などと記され、「やつ」とい

う読みが鎌倉時代までさかのぼることがわかる。

多数の谷（谷戸）が大きな要素であった都市鎌倉全体を、「谷七郷」ということばであらわすこともあった。よく知られているのは、江戸時代の歌舞伎のセリフであろう。たとえば、『世話情浮名横櫛よわなさけうきなよこぐし』（通称『切られきと三よさち』）の、源氏店での与三郎のセリフ、

「江戸の親には勘当受け、抛所よめりしりみなく鎌倉の、谷七郷は食い詰めても……」

は代表的なものである。

もう一つあげると、『青砥稿花紅彩画あおとせうしはなのにしきえ』（通称『白波五人男しろなみにんおとこ』）の、稲瀬川で盗賊五人が勢揃いする場面でも、谷七郷が登場する。すなわち、赤星十三郎のセリフ中の、

「柳の都谷七郷、花水橋の切取りから、今牛若と名も高く……」

がそれである。ちなみに、「柳の都」とは、幕府のことを「柳営」と称することによるもので、「武家の都」を粹に表現したものである。

このように、鎌倉を「谷七郷」と呼ぶことが江戸時代には広くおこなわれていたのであるが、さらに中世にまで、その使用例はさかのぼることができる。